



Title	芒亭書屋談叢：ノスタルジアの分析
Author(s)	芒亭
Citation	各務時報, 97
Issue Date	1937-06-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77287
Type	article
File Information	A018_02_03all_Part32.pdf



芒亭書屋談叢

ノスタルチアの分析

A「僕は君と違つて故郷と云ふものはないんだ。親爺がY縣出身だから僕等の原籍はY縣になつては居るけれども、そこには今では親しい親戚も無い様だし、無論家も無し、僕は一度も父の郷里と言ふ處に歸つた事はない。僕の父は小役人で轉任して廻つて居たので、僕は小學校を三度も轉校した。今度休暇になつて歸る處は父が二年前に轉任して來た所なんだ。勿論歸るのは嬉しい。借家でも父母兄弟の居る我が家には早く歸りたいよ。けれども君の様な郷土へ歸るといふ強い昂奮はないんだ。」

B「僕は去年歸つた時など、唯譯もなく歸りたかつたんだ。一年間の進歩と云ふのか、今年の僕は唯譯もなく歸りたい丈ではないんだ。郷里へ歸る事に意識的に意味をつけて、郷里に歸る事を積極的に目的化しやうとして居るんだ。」

A「意識的に意味をつけるとはどんな意味なんだ？」

B「故郷といふものを考へて見たんだ。僕はさう思つたんだ、僕の現在の生活態度は、僕の故郷の村は三十戸ばかりしかないんだが、其の三十戸の社會の人々が持つて居た社會意識の内に含まれて居る態度だといふ事がはつきり分つたんだ。勿論僕のその後創造の部分もあるだらうが、それは故郷の社會の鑄型で作られたものに比すれば、比較にならぬ程小部分なんだ。僕は此頃自分の生活態度のあらゆる方向をよく注意して見ると、理性が随分それをうち消さうとして居るけれども、かなり澤山の信仰的なものを含んでゐる。何か精神的な革命でもない限りとても捨て得さうもないんだ。そんな信仰を僕は悉く三十戸の村の社會で作られたんだ。だから僕は云はゞ僕の心の原型を意識的に見直して見たいんだ。」

A「つまり故郷の再認識、ひいて自己の再認識をしようと思ふんだねエ。分つた。けれどもそれでは君が今歸省したいといふ氣持ちは故郷を思慕する人の心の自然の現れではなく、生活態度の整理の爲の理論探求の願望の一つの現れだといふ譯だねエ。」

B「いやそればかりでもないんだ。早く故郷の山川人物に接したい。それは無條件だ。」

A「その無條件だけでいいぢやないか。僕は無條件に早く父母の家に歸りたい。君は無條件に父母のそばに、故郷に歸りたい。だが此の共通の無條件の態度はこの鑄型で作られたんだ？」

(芒亭)